

特集

2

シスコがIP統合新戦略 通信系販売店との提携を決断

シスコシステムズがネットワークとアプリケーションの密な連携を実現する新戦略「シスコユニファイドコミュニケーション」を打ち出し、企業向けビジネスコミュニケーション市場の更なる開拓に意欲的だ。なかでも中堅・中小企業分野では、これまで縁の薄かった通信系ディラーとの提携に乗り出した。

今年3月、シスコは「シスコ ユニファイド コミュニケーション (Cisco Unified Communications)」という新しいシステムを発表した。これまでの「IPテレフォニー」からさらにもう一歩踏み込み、音声からアプリケーション通信まで、企業におけるあらゆるコミュニケーションの統合に照準を合わせたものだ。また、これを機会に、中堅・中小企業の需要開拓に向け、従来はあまり接点のなかった通信系ディラーとの提携にも積極的に踏み込む考えだ。

第3フェーズに入る

シスコは言うまでもなく、ルーター、スイッチを初めとするネットワーク機器分野において他の追随を許さない世界ナンバー1のベンダーだが、企業の音声通信システム市場への進出は1997年であり歴史はまだ浅い。

しかし、その97年にルーター製品に初めてVoIPの概念を持ち込み、VoIPゲートウェイ機能を搭載し、通信業界にインパクトを与えたことは記憶に新しい。ネットワーク上での音声・データ・映像の「メディア統合」を実現した、第1フェーズだ(図1)。

より衝撃的だったのは、「企業にPBXはもう要らない」というコピーと

もに始まった1999年からの第2フェーズだ。IPネットワーク上で音声・データ・映像を統合するアーキテクチャ「AVVID (Architecture for Voice Video and Integrated Data)」構想を提示、そのIPテレフォニーソリューションで「サービス統合」へとステップアップした。

折からの日本経済の景気後退もあって、コスト削減・業務効率化を求める大企業・外資系企業を中心にこの構想は評価され、レガシーPBXからシスコのIPテレフォニーサーバーに置き換える企業が続出した。国内PBXメーカーは危機感を抱き、IP-PBX、IPセントレックスへの取り組みを強め、結果として日本の通信業界のIP化に拍車がかかった。

これに続く第3フェーズが、ネットワークとアプリケーションの統合を可能にするビジネスコミュニケーションプラットフォームとなる今回のユニファイド コミュニケーションなのだ。

では、シスコ ユニファイド コミュニケーションとはどのようなものなのか。

シスコシステムズ執行役員 ビジネス開発担当の篠浦文彦氏は、「私どもが提示するコミュニケーションとは、“ビジネスコミュニケーション”全体を指すもの。音声中心の人と人のやり

取りだけでなく、人とマシン、人とアプリケーションのやり取りなどネットワークを利用したトランザクションのすべてを含んでいる」と説明する。

つまりシスコ ユニファイド コミュニケーションは、電話に主眼を置いた業務効率化・生産性向上のためのシステムではなく、アプリケーションとの密な連携をポイントに、IT インフラとネットワークの統合によって企業のビジネス構造そのものの抜本的な改善と変革を可能にするものなのだ。

「ユニファイド」というと、「電話・FAX・EメールなどをIPで統合し、いつでもどこでも最適な手段を選んで効率的なコミュニケーションを実現する」ユニファイドメッセージを想起するが、それよりも遥かに広く深い概念だということが分かる。

新アーキテクチャで統合

シスコがシスコ ユニファイド コミュニケーションを市場に投入した背景には、ネットワーク機器の納入実績で

圧倒的なシェアを誇る大企業ユーザーのIT投資ニーズの変化がある。

企業におけるITシステムは市場環境の変化、他社との競争激化のなかで、コスト削減・顧客満足・業務革新などの命題が次々と突きつけられ、ERP、SCM、CRMなどを初めとした様々な情報システムの導入が迫られてきた。それに伴いアプリケーションの拡大とサーバーやストレージの増設が進むなかで、それへの対応としてサーバーの集中化や仮想化といった諸々の手立てが打たれてきた。

現在は、こうしたサイクルに追われることから脱却するためにも、必要なリソースをオンデマンドで容易に利用できるSOA (Service-Oriented Architecture: サービス指向アーキテクチャ)やWebサービスに関心が集まっている。しかし、こうした新しいITシステムを実現するには、強力なネットワークシステムをベースにしたビジネスプラットフォームの整備が必要との認識が高まっている。

シスコは、この点に着目した。つまり、ITインフラとしてもコミュニケーションインフラとしても耐える統合ネットワークをベースとして、両者に共通するプラットフォームを開発しようというのだ。その具体的な仕組みが、「Cisco Service-Oriented Network Architecture」(SONA)というアーキテクチャである。シスコ ユニファイド コミュニケーションはこのSONAを核としてはじめて可能となった(図2)。

SONAは、分散したアプリケーションやサービスを共通のプラットフォーム上で集中的に管理することで、ネットワークインフラがさまざまな通信に対して動的に適応できる仕組みを提供する。「SOAやWebサービスの実現を加速するための、ネットワーク側からの初めてのアプローチ」だ。

その構造を見ると、ネットワークインフラレイヤとアプリケーションレイヤの間に「インタラクティブサービスレイヤ」が位置づけられ、両者の連携および一元管理を実現するさまざまな機能を提供している。この点が一番の特徴となっている。

例えば、企業システムのセキュリティ設定を行う場合、従来はアプリケーションごとに機能の作り込みとネットワーク側の設定を行う必要があった。しかし、SONAが提供するセキュリティサービス機能を利用すれば、その必要はなくなる。システム全体のポリシーを1つ設定するだけ

図1 シスコ ユニファイド コミュニケーション実現までの3つのフェーズ

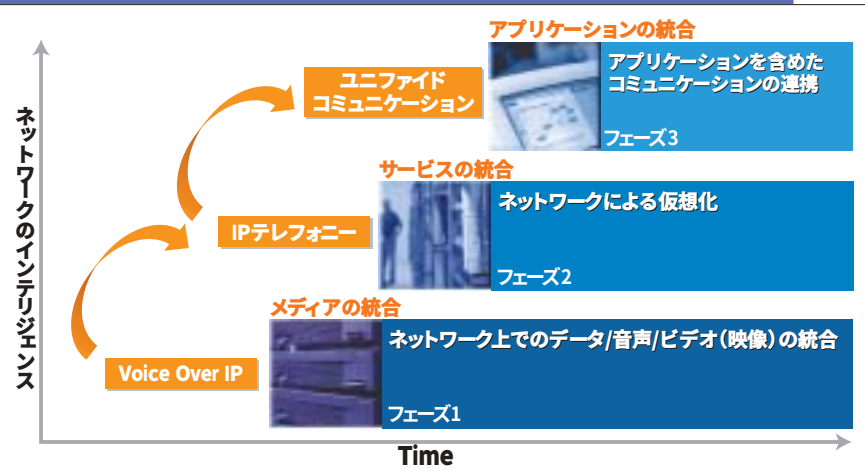
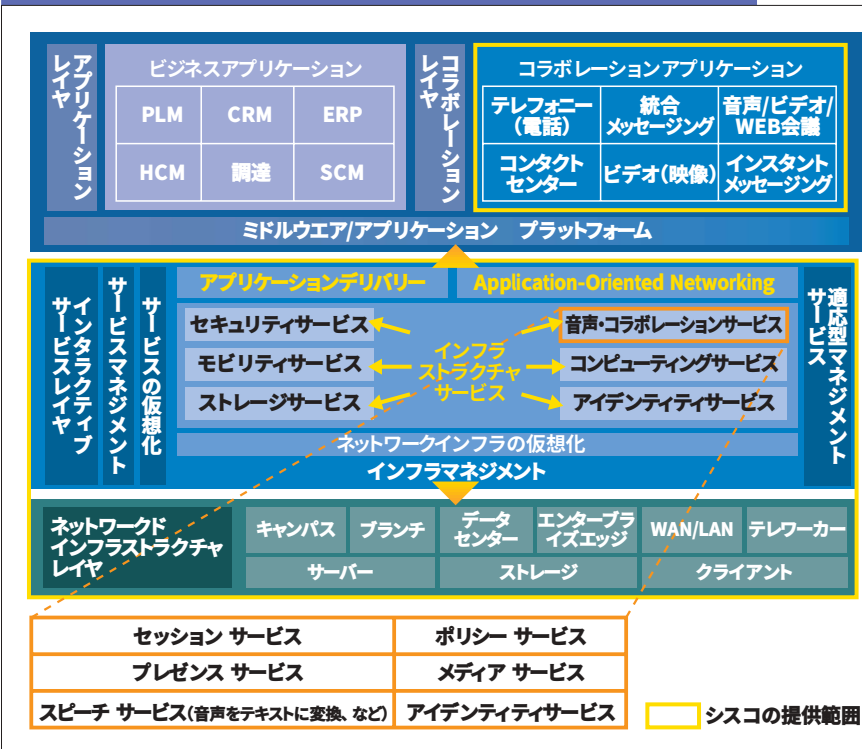


図2 Cisco SONA (Service-Oriented Network Architecture)



SOA

SOA service-oriented architecture:さまざまなアプリケーションの機能を独立した「サービス」という単位で実装し、それらを組み合わせでシステムを構築する考え方。サービスをネットワーク上に公開し、オープンなインターフェースで相互に連携させることで、効率的なシステムの利用、変更・拡張時の柔軟な対応が可能になる